

野外彫刻を求めて北上の旅

2014.6.22

望田武司

t21xmochida@feel.ocn.ne.jp

世に、地域にいろいろなボランティアがあるが、公園や構内にある野外彫刻を、せっせと清掃している団体もある。

長年風雪に晒されて酸性雨によって傷み、あるいは鳥の糞によって汚された野外彫刻の劣化は激しく、単に雑巾がけをすればいいというものではないらしい。

特殊な洗剤から高速洗浄機まで、そこは彫刻を愛する人たちのノウハウによって手際よく進められていく。

(写真右：クラーク像の清掃 09年9月、札幌羊が丘)



2時間ほどすると、きれいさっぱり、彫刻を人間に譬えればお風呂上がりの気分だろう。こうした彫刻愛好家による、バスツアーが企画され、6月半ば過ぎ私も参加させてもらった。

< アルテビアッツァ美唄 >

北海道中央自動車道を北上して空知平野を突っ走ると、半月前に田植えをした水田は、はや田んぼに張った水が見れないくらい稲は生長している。



最初の見学地は、空知のほぼ中央に位置するアルテビアッツァ美唄である。

彫刻家としてイタリアを舞台に、世界的に活躍している安田侃(かん)が、故郷の美唄に作った芸術広場だ。

炭鉱都市として全盛期には7万人の人口を抱えた美唄であったが、閉山後は急速に衰えて現在は人口2万人余、コメ、アスパラガス・イチゴ・ハスカップなどをおもな産物とする農村に変わった。

廃校となった小学校には体育館に、教室に、そして広い校庭に大理石やブロンズの作品40基ほどが点在展示されており、炭鉱住宅街跡地に再生された周囲の緑の山々や清流に囲まれた空間は、まさに野外彫刻公園となっている。(写真左から校庭、体育館、教室)



安田侃の作品はいずれも抽象的なものばかりで、そのなかでもガチョウの卵を数百倍にしたような大理石の楕円の彫刻がとくに有名だ。

この“超特大ガチョウ卵”は、あちこちにあり、札幌市内だけでも知事公館（写真右）・中島公園・札幌駅・大通公園に面したビル空間など、私が知っているだけでも4カ所もある。

芸術心を持たない私は、安田侃は同じものばかり作って楽しんでいるな…と当初思っていた。

ところが何度もアルテピアッツァ美唄を訪れているうち、この触れなくなる抽象彫刻が、次第に味わいのある彫刻に見えてくるのだから不思議だ。



10年ほど前、天皇皇后両陛下がアルテピアッツァ美唄を視察された。

イタリアで制作活動をしていた安田侃は、わざわざ帰国して案内役をつとめた。

事前に視察した宮内庁の役人から、安田侃は、両陛下に対し決して「作品に触れてみてください」と強要するなとくぎを刺されたという。

ところが、安田侃が説明しているうちに、美智子妃殿下が大理石でできた超特大のダチョウの卵をそっと触れたという。

7年程前に最初に当地を訪れたとき、若い女性学芸員がその時の様子がとても面白かったと笑いながら説明してくれた。

アルテピアッツァ美唄を訪れるたびに、この話を思い出す。そして宮内庁の役人の事大主義的な体質にあきれるとともに、それが仕事だと思っている役人が気の毒にも思えたものだ。



今回訪れて体育館のアートスペースに、両陛下が視察され安田侃が説明している写真が展示されていた。（写真左）

この写真はたしか直近の2年前に訪れたときはなかったはずだ。

説明を聞いている美智子妃殿下は恐らく、この写真の前後に作品にそっと手を触れたのだろう。

じつは、この作品に手を触れてみたくなる、ここに安田侃の芸術があるのだという。

この抽象的な造形物を見て、これは何を意味するのだろう、何を象徴しているのだろうと鑑賞者を惹きつけ、思わず触れてみたくなる吸引力、それが安田侃の作品の魅力だという。

ふつう作品にはそれぞれ題名がついているものだ。

札幌・中島公園にある超特大のガチョウの卵（写真右 11年10月）には案内板があり、確か『相響』という題名がついていた。

ところがアルテピアッツァ美唄に展示されている40点ほどの作品には、題名が表示されていない。

題名によって潜入観念を持たないように、純粹な気持ちでこの



抽象造形物を鑑賞してもらおうという安田侃の意図が反映されているという。



この話は、今回説明してくれた学芸員によって初めて聞くことができた。

訪れるたびに新しい発見がある。

今回は小雨模様の中での訪問であったが、小雨が気にならないくらい時間がゆったりと流れる空間と造形物がそこにあった。

(写真左)

< 三浦綾子記念文学館 >

バスは一路北上して旭川にある三浦綾子記念文学館についた。明治時代からヨーロッパカラマツやストロブマツなど外国の樹のみを植林した外国樹種見本林に隣接して建てられている。夫が営林局の職員であったご縁で当地に建てられたという。

文学館に通じる道路は、天をつくような見事な針葉樹が聳えたち、その幹にツルアジサイが一杯に這って上に伸びて、今がちょうど見ごろだ。

ツルアジサイは一般的に森の奥のトドマツなどに寄生しているのを、遠くからよくみかけるが、ここでは道の傍らの目と鼻の大木にまつわりついて、わが世の春を謳歌している。

森に入ったことのない参加者にとっては珍しい光景で、文学館に入る前から、「この花な〜に？」と盛んにシャッターを切っていた。



主婦であった三浦綾子を、一気に有名にしたのは朝日新聞の1000万円懸賞小説である。1963年、朝日新聞社創立の節目に企画された、当時としては破格の1000万円の賞金小説に応募した「氷点」が見事に当選したのだ。

私が社会に出て間もないときで、よく覚えている。

社会人になって初めてもらった給料、初任給が¥31300だった。これもよく覚えている。

今日の大卒初任給が18~20万円弱だとするとざっと6倍だ。

従って当時の1000万円は、6000万円前後に相当する前代未聞の懸賞小説で、一介の主婦が大金を射止めたのだ。



人間の原罪を描いた「氷点」は、その構成力・筆力からして賞金目当てのプロではないか、素人が書いたとは思えないとして、審査員の意向を受けて朝日新聞学芸部の記者が調査



「偵察」に旭川まで足を運んだ。

そして、間違いなく素人の主婦であることを確認して当選の発表が行われたという。

三浦綾子の作品に親しんだ私は、この記念館にもこれまで2度足を運んでいるが、ここでも今回学芸員から初めて聞くエピソードに接することができた。

文学好きであった綾子は、1000万円懸賞小説の募集を知った弟から、「姉ちゃんも書いてみたら」とそそのかされて書く気になり、時にはちゃぶ台に座り、時には蒲団に入りながら寒い冬に耐え1年かけて書いたという。

三浦綾子の名作の一つに「塩狩峠」がある。

天塩の国と石狩の国の接点にある塩狩峠を喘ぎながら上る列車が突然逆走した。

非番でキリスト教伝道のため列車に乗り合わせた国鉄職員長野政雄は、このままでは列車は脱線して大惨事になると思い、咄嗟に身を線路に倒して、列車を止めた。長野は絶命した。その晩長野は身体の不自由な札幌の恋人との結納の日でもあった。

悲報を知らされ、茫然となった恋人は、しばらくして長野の友人だった兄と一緒に塩狩峠を訪れた。



そして、持ってきたユキヤナギの花束を線路におくと、そのまま突っ伏して大声をあげて泣いた。

泣き声はこだまし、カッコウが呼応するかのよう「カッコウ」と鳴いた。

キリスト教の人類愛、自己犠牲が見事に表現された作品である。

この列車事故は実際にあった話である。

事故があって100年目の2009年盛大な追悼式があったが、私はその前年99年目に塩狩峠を訪れた。(写真左上：08年6月)

何もない所であった。事故のあと勾配を緩めたという。

わずかに殉職した長野を慰霊する碑と、三浦綾子が旭川で住んでいた家が記念館として移築・保存されていた。(写真右)

塩小売りの看板があり、菓子や小物を売る“よろず屋”であつたらしい。その居間に、三浦綾子が氷点を書いたというちゃぶ台が一つポツンと置いてあった。



確か「狭い家でもいいな、トイレに入っても声が聞こえる」と初めて家を持った喜びの一文が、壁に掲げられていた。

三浦綾子記念文学館に入ると、三浦夫妻の仲睦まじいツーショット写真が大きく展示されていた。



三浦綾子が没する 10 年ほど前の 60 代の写真であるという。三浦綾子は晩年病に苦しみ、夫の口述筆記によって作品を次々に発表していった。

三浦綾子の作品はゆうに 700 万部を超え、今日でも一年に 1 万部は売れているという。根強い三浦文学ブームが窺える。

< 旭川買物公園 >

バスツアーの主催者は彫刻を愛するご婦人たちだからであろうか、選んだ訪問先が文化の薫り高いところばかりだ。

参加者も満席の 50 人の内、40 人がご婦人という女性優位ツアーでもある。

昼食はと言うとホテルの 14 階の最上階のレストランで、洋食ときた。

レストランは一度に 50 人もの料理を出したことはないと言い、パンとご飯派に部屋が分けられて、てきぱきと料理が運ばれてきた。

バスの中でも、昼食会場でもご婦人ならではのこまやかな配慮が感じられ、数少ない殿方の気分は悪くなるはずはない。

午後からは旭川の買物公園にある“彫刻見て歩き”である。

この買物公園は時の市長であった五十嵐広三が全国で初めて、駅前商店街から車を締め出して歩行者天国にしたことで知られる。

このアイデア市長は、初の民主党政権となった村山内閣の官房長官として活躍するが、その後引退し、昨年没した。



買物公園には十数基の彫刻が適当な間隔で立っている。

旭川に来ると買物公園はよく歩くが、野外彫刻観賞のために歩くというのは初めてだ。

佐藤忠良（写真右）や加藤顕清（左）など、著名な彫刻家の作品から、よくテレビで紹介される彫刻（中）まで、ご婦人の後ろにくっついて観賞し、皆さんの話を聞くだけでも楽しい。

ただ残念なことに時間がなくて全部見ることはできなかった。



野外彫刻の劣化は激しいという。

とくに最近ではコンクリート彫刻の傷みが激しいということ、帰路の車中で専門家から聞かされた。

コンクリート彫刻は高度経済成長と共に公共投資が盛んになると、セメント業界は活況を呈し、素材のセメントが彫刻家にも大量に流された。

セメントは安価であるためコンクリート彫刻はあちこちに建てられ、一時ブームになったという。

それからほぼ半世紀、誰が維持管理していたのだろう。

公共の場での野外彫刻なら、誰しもが自治体ではないかと思う。

しかし現実には建てっぱなしで、後は知らん顔だという。

(写真右：最も傷みの激しい札幌円山動物園正面のコンクリート像“よいこ つよいこ”、頭や体にひびが入って、剥がれ落ちそうで清掃もままならなかったという)



公共施設の入口や車寄せのところに、よくコンクリート彫刻が建っている。

また公園などの憩いの場にはブロンズ像が建って、へそになっている。

なかったら寂しいし、あればあってあたり前だと思われているのが、野外彫刻である。

お近くの野外彫刻の傷み具合を見つめると、野外彫刻の見方も変わって来るかもしれない。そんな気がしたバスの旅であった。

##